

ノーサイド

大本山總持寺布教教化部参禅室長 花和 浩明

今年、ラグビーワールドカップが日本で開催されました。日本チームの大活躍もあって、国中の話題をさらいました。

今回のワールドカップの一つの試みが、東日本大震災の被災地、釜石市での開催でした。釜石市はかつての実業団の強豪、新日鉄釜石の地元でもあり、ラグビーの町としても知られていました。

今回の開催は、被災地に勇気を与えてくれるものとして大いに期待されていました。しかし、予定されていた二試合のうちの一試合は台風19号の影響で、中止となり、延期はしないという決定がなされました。ワールドカップ観戦を心待ちにしていた地元の方々の失望は計り知れないものでした。

そんな中、カナダチームの選手たちは試合が中止になった次の日も地元に残り、台風被害のあとかたづけにチームプレイで汗を流したのです。この行動は、ニュースにもなり地元の方だけでなく日本中の人の心をほっこりと温めてくれたのです。

ラグビーでは試合終了のことをエンド (end) と言わず、ノーサイド (no side) と言います。これは、「敵味方がなくなり同じ仲間同士に戻った」という意味です。ラグビーは、勝ち負け以上に、戦う相手への尊敬の気持ちを大事にするスポーツだといわれています。だからノーサイドという言葉がしっくりくるのです。本来すべてのスポーツがそういうものだったのかもしれませんが。

カナダチームの行動は、他国とか地元とかいう垣根を取り払った、まさにノーサイドの行為だったのです。

ところで本山では、僧侶同士が廊下ですれ違う時には、立場や年功の差にかかわらず、必ずお互いに合掌しあい軽く頭を下げ挨拶してから通り過ぎます。これは、お釈迦様の時代から続けられている行為で、相手のことを仏として敬う意味をもちます。本来仏教では、人びとすべてが仏であり、仲間であると教えます。

人は、それぞれの我見によって垣根を作ってしまう。しかし、その垣根を取り払って、真心をもって世界中の人びととお付き合いできれば、もっともっと平和で幸せな心になれるのではないのでしょうか。